

日本人学部生と留学生による就職活動の相談に 用いられる相談者の表現形式

Description of consulters' expressions at consultation of jobhunting by Japanese native undergraduate students and foreign students

小林 友美
KOBAYASHI Tomomi

小林 友美
KOBAYASHI Tomomi

〔要旨〕

本研究の目的は、母語場面と日韓の接触場面の相談の談話を対象に、相談者が用いる表現形式を明らかにすることである。参加者の発話機能に基づき、表現形式を分析した結果、学習者の相談者は、主に発話機能の〈Ⅲ. 要求〉の発話を用いて談話展開するのに対し、母語話者は、〈Ⅲ. 要求〉以外に〈Ⅳ. 提供〉や〈Ⅴ. 受容〉を用いながら、相互作用の顕著な談話展開をすることが明らかになった。また、母語話者は、「a. 応答確認」、「b. 前置き+質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」を用いて、積極的に話に参加していた。学習者も「d. 応答のまとめ」、「f. 共通の話題」以外の発話は共通して見られたものの、出現数は少ないことが明らかになった。そこで、日本語の会話教育では、会話参加者との相互作用を意識した談話展開のための表現形式を指導する必要があることを提案した。

Key word: 相談、相談者、発話機能、表現形式、談話展開



1. 本研究の目的

本研究は、日本語の会話教育に応用するための基盤的研究として、日本人学部生と留学生による就職活動の相談の談話を対象に、相談者の表現形式を明らかにするものである。本研究では、大学生¹⁾である日本語母語話者と留学生²⁾である日本語学習者が相談者の場合を設定し、相談者の役割に焦点を当てて分析をする。

日常生活において、相談場面は様々ある。直接口頭で相談するものをはじめ、電話、ラジオ、メール、インターネット上で相談するもの等多種多様である。相談相手も友人や専門家、カウンセラー等様々であり、相談内容も事務手続きのようなものから、心身の悩みのようなものまで多岐に渡る。本研究の相談は、日本語教育に応用する目的から、大学の先輩に就職活動の経験談を聞き、相談をするという大学生が遭遇しやすい場面の自然談話を対象にする。

相談の談話は、相談者の「相談」と回答者の「回答」のやりとりが主要な部分を占める。相談者は回答者から自分の知りたい回答を得るため、自分の状況を説明し、回答者に質問をして情報収集をする。回答者の情報を理解した上で、さらに質問を重ねたり、確認をしたりしながら相談の談話を展開していく。このように、実際の相談場面では、様々な口頭表現の運用の習得が不可欠である。

そこで本研究は、母語場面と接触場面の相談の談話を対象に、相談者がどのような表現形式を用いて談話を展開しているのかを明らかにし、会話教育へ提案することを目的とする。

2. 先行研究

相談の談話に関する先行研究には、NHK ラジオの教育相談番組を対象に、回答者の説得行動を分析した村上（1995）、ラジオ相談番組の回答者の行為を示す発話機能分析した湯浅（2004）等がある。また、鈴木（2009）は、ラジオ番組の医療相談と心理相談を対象に「機能文型」に基づく「談話型」を解明し、田中（2011）は、Yahoo！知恵袋等を対象に「質問——回答」における待遇表現の特徴を分析した。以上のように、ラジオやインターネットというメディアを通じた相談を分析対象としている先行研究が多いが、本研究は自然談話を対象とする。鈴木（2009）は、相談者である学生が図書館員に文献検索の方法を相談する自然談話も対象にしている。また、田中（2017）は、『談話資料 日常生活のことば』に収録されている、相談相手が美容師、店員、先生である日常談話を対象に談話構造を分析している。このように相談の自然談話を対象に分析した研究もあるが、本研究の調査協力者は、学部生の同年代同士であるため、鈴木（2009）、田中（2017）とは異なる結果が予想される。また、本研究は、母語場面のみならず、接触場面の談話も対象に表現形式を分析するため、日本語の会話教育への応用が期待できると考えられる。

分析観点には、ザトラウスキー（1993）、鈴木（2003、2009）の「発話機能」を用いる。ザトラウスキー（1993）は、勧誘の談話を対象に、参加者の異なる談話の目的や「発話機能」の使

用の違いから、「話段」³⁾を区分し、日本語の談話の構造分析をした。本研究でも、「発話機能」を用いて相談者の発話を分析する。

3. 研究方法

3.1 談話資料の収集方法と調査手順

本研究は、日本語の母語場面の【資料 1】～【資料 8】の 8 資料と、日韓の接触場面の【資料 9】～【資料 16】の 8 資料からなる全 16 資料（各資料約 15 分間、全 16 資料約 4 時間）の就職活動の相談の自然談話を対象にする。表 1 に談話資料の概要を示す。調査協力者は、回答者である就職活動経験者の 4 年生と、相談者である就職活動中の主に 3 年生である。場面設定の理由は 2 点ある。第 1 に、最近、日本企業への就職を希望する日本語学習者が増加傾向にあるため、日本語の会話教育に応用できることにある。第 2 に、実際に起こり得る場面⁴⁾であるため、談話の参加者の動機が高く、より自然な談話を収集できるのではないかと考えたためである。

調査協力者は、回答者である日本語母語話者 2 名⁵⁾（回答者 F と回答者 N）、相談者である日本語母語話者 8 名（NS1～NS8）と日本で就職活動をしている韓国人上級日本語学習者 8 名（NNS1～NNS8）である。本研究は、相談者の役割に焦点を当てるため、回答者を 2 名に限定し、各回答者、8 名の相談者と会話をしてもらった。学習者の国籍と日本語レベルは、条件を揃える目的と筆者の教育経験により設定した。会話は 1 対 1 形式の初対面のペアで、回答者には相談者の氏

表 1 談話資料の概要

資料番号	回答者 (就職活動経験者の大学生)		相談者 (就職活動中の大学生と留学生)		
【資料 1】	回答者 F	4 年生	NS1	相談者 K	3 年生
【資料 2】			NS2	相談者 O	3 年生
【資料 3】			NS3	相談者 T	3 年生
【資料 4】			NS4	相談者 K	3 年生
【資料 9】			NNS1	相談者 K	3 年生
【資料 10】			NNS2	相談者 H	3 年生
【資料 11】			NNS3	相談者 B	4 年生
【資料 12】			NNS4	相談者 S	3 年生
【資料 5】	回答者 N	4 年生	NS5	相談者 Y	3 年生
【資料 6】			NS6	相談者 I	3 年生
【資料 7】			NS7	相談者 S	3 年生
【資料 8】			NS8	相談者 H	3 年生
【資料 13】			NNS5	相談者 U	3 年生
【資料 14】			NNS6	相談者 C	3 年生
【資料 15】			NNS7	相談者 M	3 年生
【資料 16】			NNS8	相談者 J	1 年生

名を、相談者には回答者の氏名、学部、内定した企業の業種について事前に知らせておいた。

調査⁶⁾は2012年12月22日と26日に実施した。相談者には、事前に、「15分間でできる質問を順番に箇条書きにして、メモを用意する」よう指示し、調査当日は、「メモ通りではなく、臨機応変に対応しても構わない」という指示をした。不自然さを避けるために、回答者には相談者の質問内容は伝えず、「就職活動について質問されるので、15分間話してください」と指示をした。各相談者には、相談の目的を強化するために、会話終了後、聞いて分かったことをワークシートにまとめてもらった。また、回答者には、会話終了後、チェックリスト⁷⁾に相談者の評価を5段階でしてもらい、後日、フォローアップインタビューをした。以上の手順で調査を実施し、談話を収集⁸⁾した。

3.2 分析方法

分析観点は、参加者の発話機能の用いられ方、表現形式の2点である。参加者の発話機能の用いられ方を明らかにするため、ザトラウスキー(1993)の「発話機能」を再分類した鈴木(2003、2009)の「発話機能」を一部修正した表2の全5類39種の分類を用いた。本研究の談話資料の発話の名称に相応しいことから、〈IV 1. 事実説明〉、〈IV 2. 見解表明〉、〈IV 3. 評価表明〉は鈴木(2003)に従っている。

全発話を分類し、参加者別の「発話機能」の出現傾向を分析する。その後、相談者が用いる特徴的な発話を抽出し、「発話機能」に基づき、表現形式を分析する。以上の2点を分析観点に、就職活動の相談の談話を分析する。

表2 本研究における「発話機能」の分類全5類39種

Ⅰ. 注目要求			
Ⅱ. 談話表示			
A 話題開始機能			
a1 話を始める機能	a2 話を再び始める機能		
B 話題継続機能			
b1 話を重ねる機能	b2 話を深める機能	b3 話を進める機能	
b4 話をうながす機能	b5 話を戻す機能	b6 話をはさむ機能	
b7 話をそらす機能	b8 話をさえぎる機能	b9 話を変える機能	
b10 話をまとめる機能			
C 話題終了機能			
c1 話を終える機能	c2 話を一応終える機能		
Ⅲ. 要求			
1 確認要求	2 判定要求	3 選択要求	4 説明要求
5 単独行為要求	6 共同行為要求	7 言い直し要求	
Ⅳ. 提供			
1 事実説明＊	2 見解表明＊	3 評価表明＊	4 意志表明
5 選択情報提供	6 言い直し	7 応答	
Ⅴ. 受容			
1 関係作り・儀礼	2 自己注目表示		
3 相手への注目表示			
a 継続	b 承認	c 否認	d 確認
e 興味	f 共感	g 終了	h 同意

(注*印は、鈴木(2003)に従う。「II. 談話表示」の下位項目14種は、佐久間(2002)の「接続表現の文脈展開機能」による。

4. 分析結果

4.1 参加者別の発話機能の出現傾向

表3に母語場面の全8資料、表4に接触場面の全8資料の参加者別発話機能数を示す。表3と表4によると、母語場面の発話総数は4,421発話、接触場面は4,094発話で、母語話者のほうが発話機能を多く使用している。相談者の発話機能数は、母語場面は2,009発話、接触場面は1,830発話でほぼ同等である。

相談者の5類の発話機能数を種類別にみると、まず、〈Ⅱ．談話表示〉のうち、母語話者と学習者で差があるのは、〈話を変える機能〉(母語話者：12発話、学習者：3発話)と〈話をまとめる機能〉(母語話者：7発話、学習者：1発話)である。母語話者は、「じゃあ」等の〈Ⅱ．談話表示〉を用いた発話で話題展開をしている。〈Ⅲ．要求〉は、〈確認要求〉(母語話者：81発話、学習者：67発話)で若干母語話者が多い。母語話者は、「～ですね」等の〈確認要求〉を用いた発話で、回答者の応答を確認しながら、談話を展開している。〈Ⅳ．提供〉は、「～と思います」等の〈見解表明〉(母語話者：197発話、学習者：93発話)と「大変でしたね」等の〈評価表明〉(母語話者：43発話、学習者：23発話)は約半数しかない。

〈Ⅴ．受容〉では、下位分類10種を種類別に見ると、母語話者と学習者で大差があったのが、〈興味〉(母語話者：160発話、学習者：84発話)と〈共感〉(母語話者：49発話、学習者：8発話)であった。母語話者は、〈興味〉や〈共感〉を用いた発話で、回答者に反応をしている。

以上のことから、母語話者と学習者は、発話機能数は同等だが、発話機能の用いられ方が異なるということが分かった。母語話者は、〈Ⅲ．要求〉を用いて質問する以外に、〈Ⅱ．談話表示〉で話題を進行、展開させている。また、〈Ⅳ．提供〉で自分の情報や共通の話題を提供したり、〈Ⅴ．受容〉の〈興味〉、〈共感〉の発話により、応答に対する感想を言ったりして積極的に会話に参加している。つまり、相互作用の顕著な談話展開をしているといえる。

一方、学習者は、〈Ⅲ．要求〉の〈説明要求〉と〈判定要求〉を用いた発話で、回答者に質問をすることに重きが置かれている。母語話者より、〈確認要求〉で応答確認をする発話や、〈Ⅳ．提供〉と〈Ⅴ．受容〉の発話が少ない。〈Ⅳ．提供〉は、自分の就職活動の現状等を話す〈事実説明〉、回答者の回答や就職活動に関する自分の見解や、評価をする〈見解表明〉、〈評価表明〉である。〈Ⅴ．受容〉は、母語話者同様、〈継続〉、〈承認〉は多いものの、〈興味〉や〈共感〉が少ない。つまり、学習者は、回答者の発話への関わり方が希薄な談話展開をとる傾向があるといえる。

4.2 表現形式の種類

本節では、相談者が用いる特徴的な発話を抽出し、「発話機能」に基づき、発話例とともに表現形式の種類を挙げる。

母語場面の談話には、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、

38

表 4 接触場面全 8 資料の参加者別発話機能数

話段 区分	発話機能合計			I.	II. 談話表示										III. 要求							IV. 提供							V. 受容							発話機能数合計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
	参加者	大話段における割合	総数に対する割合	注目要求	A.			B.							C.	1							2							3							参加者別発話機能合計	大話段における割合	発話機能総数に対する割合																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
					話を始める機能	話を再び始める機能	話を重ねる機能	話を深める機能	話を進める機能	話をうながす機能	話を促す機能	話をほらめる機能	話をそらす機能	話をとどめる機能	話を交える機能	話をまとめる機能	話を終える機能	話を一応終える機能	確認要求	判定要求	選択要求	説明要求	単独行為要求	共同行為要求	言い直し要求	事実説明	見解表明	評価表明	意志表明	選択情報提供	言い直し	応答	自己注目表示	継続	承認	否認				確認	興味	共感	終了	同意																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
I.	相	36	46.2%	1.0%	1																1	1			1																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	

「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」という特徴が見られた。接触場面にも、「a. 応答確認」、「b. 前置き+質問」、「c. 話題転換」、「e. 応答に対する反応」は共通して用いられたが、出現数は少なかった。以下、発話例を挙げて特徴を示す。

a. 応答確認

例(1)は相談者 O (NS1) の「応答確認」である。回答者 F が最終面接で不採用になったという発話を受け、〈確認要求〉の「～んですね。」を用いて、応答確認をしている。母語話者には応答確認の発話が多く出現した。

(1) (【資料 2】母語場面、相談者 O (NS1)、回答者 F)

- 79 F まだ内定が何もない段階で、
 80 O はい。
 81 F 最終面接にぼんぼんって 2 つ企業いった時に、
 82 O はい。
 83 F あの一、これどっちか内定出るだろうって // 思ってたら、
 84 O はい。
 85 F どっちも両方に落とされてっていう。
 86 O え、最終面接で結構落とされることあるんですね？
 87 F そうですね、企業によって // ですけど。
 88 O あ————、はい。

b. 前置き+質問

この発話は、母語場面と接触場面で共通した特徴であり、ほぼ全員の相談者が使用していたため、複数の発話例とともに詳しく後述する。

c. 話題転換

例(2)は、メタ言語表現の「次なんですけれども、」を用いて、「話題転換」をする例である。

(2) (【資料 2】母語場面、相談者 O (NS1)、回答者 F)

- 73 O あの、次なんですけれども一、
 74 O 就活中で最も苦労したことと、
 75 O またそれをどうやって乗り切ったのかっていうのを教えていただければ。
 76 F 苦労したことは一 //、その一、4 月の中旬頃に、
 77 O はい。

d. 応答のまとめ

例(3)は、「応答のまとめ」の例である。501K で、企業研究を何社ぐらいしていたかについて相

談者 K が質問したことをについて、回答者 F が 505F、508F で応答する。その応答に対して、相談者 K が、509K と 515K で言い換えて回答者 F の応答をまとめ、〈確認要求〉をする。相談者 K は、515K で〈II. 談話表示〉〈話をまとめる機能〉の「じゃあ、」を用いている。

(3) (【資料 4】母語場面、相談者 K (NS4)、回答者 F)

- 501 K 何社ぐらいなんかこう、見たりしてました？
 502 F 30 社ぐらいですねー。
 503 — 【タイマー】
 504 K あの、プレエントリーを出したぐらい？
 505 F ま、エントリーシートを提出する // ぐらい、ですね。
 506 K ぐらい。
 507 K あー。
 508 F 30 社もなかった // かな。
 509 K そんなに量は見ない感じですね。
 510 F 行けないって // いう。
 511 K そうですよ {笑い}。
 512 F 時間がなくて。
 513 K なるほどなるほど。
 514 F はい。
 515 K じゃあ、結構集中型って感じですね。
 516 F そうですね、一日 2 個とか、2、3 個行っても、
 517 F あまり、そのぐらいの数だったんで、僕は。
 518 K はい。

e. 応答に対する反応

相談者の回答者の「応答に対する反応」は、接触場面よりも母語場面の方が多い。例えば、例(4)のように、回答者 F の応答に対して、〈IV. 提供〉の〈見解表明〉や〈評価表明〉、〈V. 受容〉の〈興味〉、〈共感〉で反応をする例は母語場面の全 8 資料に見られた。例(4)は相談者 K が回答者 F に 338K と 345K で〈評価表明〉を用いて反応する。「～ね」、「～よね」を使用し、OB・OG 訪問の約束を取るために電話したことについて、338K 「大変でしたね」、345K 「緊張しますよね」という「共感」を表す反応の例である。

(4) (【資料 4】母語場面、相談者 K (NS4)、回答者 F)

- 329 K OBOG 訪問した時ってのは、結構人のコネとかっていうのをよく聞くんですけど。
 330 F いや、僕は // 先輩、全然いなかったんで、
 331 K キャリア、
 332 K キャリアセンター、

- 333 F 名簿見て、
 334 K あ。
 335 F A大学の//電話して、
 336 K {笑い} 電話して、あー。
 337 F 頑張りました。
 338 K あー、{笑い} 大変でしたねー。
 339 F すごい緊張します。
 340 F でも、1回電話//始めたら、
 341 K はい。
 342 F ほんと結構//楽になるんで、
 343 K はい。
 344 F 最初の1本目だけ緊張//します。
 345 K 緊張しますよねー。

f. 共通の話題

例(5)は、相談者Tが回答者Fの応答に反応し、「私も～」という「共通の話題」を提示している。

(5) (【資料3】母語場面、相談者T(NS3)、回答者F)

- 36 F あの一、海外に行けるような企業で//探してたんですね。
 37 T うーん。
 38 T はい。
 39 F だから、その一、食品だけじゃなくて、
 40 F もちろん、商社とか。
 41 T はい。
 42 F 実は、商社に一番行きた//かったんですけど、
 43 T あ、そうなんですか。
 44 F 商社とか、あと、ま、ほんとに銀行とかも//色んな業界受けましたねー。
 45 T うんうん。
 46 T あー、私もA学部なんで、
 47 F はい。
 48 T なんか、2回ぐらい留学行ったんで、
 49 T 結構、海 {くしゃみ} 外行きたいなとかって思ってた、
 50 F はい。
 51 T 食品って結構海外行けるんですか？
 52 F 食品はそうですね、

以上のように、母語話者の相談者は、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」を用いて、積極的に話に参加している。学習者も「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「e. 応答に対する反応」の発話は、共通して見られたものの、出現数は少ない。そのため、会話教育において、回答者との相互作用を意識した談話展開のための「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」に出現した表現形式を学習する必要がある。

次に「b. 前置き＋質問」について言及する。これは、母語場面と接触場面ともに見られた共通の特徴である。「前置き」の内容は様々で、例(6)の自分の就職活動の状況を「～ですけど、」で示すもの、例(7)の自分の見解を「～と思うんですけど、」と示すもの、例(8)の聞いた話題を「～と聞いたんですけど、」と示すもの、例(9)の回答者の先行発話を、「先ほど～とおっしゃってたんですけど、」で反復するもの、例(10)の「～について聞きたいんですけども、」とこれから話す話題を予告するメタ言語表現等がある。例(11)の韓国の事例を「前置き」で示し、その後、日本の状況を聞く質問は、【資料 12】のみに観察された。

以下、6 種の発話例を例(6)～例(11)に示す。

(6) ①自分の活動状況＋質問（【資料 3】母語場面、相談者 T（NS3）、回答者 F）

- 98 T えーと、なんだ、あの、ES とか、今、書き出したんですけど、
 99 F はい。
 100 T どういうことに注意していけばいいですか？
 101 F やっぱり、その、志望動機っていうのは、その会社ごとに考えるしかないので、
 102 F なんととも言えないんですけど、

(7) ②自分の見解＋質問（【資料 4】母語場面、相談者 K（NS4）、回答者 F）

- 27 K あの―――、なんかお、落ち込んだ時とかって、たくさんあったと思うんで
＝すけど、
 28 F はい。
 29 K どうやって対処してましたか？
 30 F 僕はやっぱり、友達に話して // ましたね。
 31 K あ―――、なるほど。

(8) ③伝聞＋質問（【資料 1】母語場面、相談者 K（NS1）、回答者 F）

- 129 K あの、銀行とか商社って 1 日から始まるって言うじゃないですか、面接。
 130 F はい。
 131 K それで、バッティングっていうふうに聞いた // んですけど、
 132 F はい、はい。

133 K それってありました？

134 F えっと、バッティンググー、僕はあんまりなかったですね。

(9) ④回答者の先行発話+質問 (【資5】母語場面、相談者 K (NS5)、回答者 F)

294 K あとー、さ、さっき商社とか、興味あったとかおっしゃったんですけど、

295 F =はい。

296 K 商社の面接とか受けましたか？

297 F そうですね、商社は // ー、7 社全部受けて、

298 K はい。

299 K はい。

(10) ⑤話題の予告+質問 (【資料8】母語場面、相談者 H (NS8)、回答者 N)

27 H はい、じゃあ、まず始めに、じゃ、志望した業界とか企業のことについて //
聞きたいんですけども、

28 N =はい。

29 H なんかどこを志望されましたか？

(11) ⑥韓国の事例+質問 (【資料12】接触場面、相談者 S (NNS4)、回答者 F)

472 S ちょっと、韓国は面接のために、

473 S これ、なんて言えばいいか、ちょっと分からないんですけど、

474 S なんかアカデミーみたいな // ものがあってー、

475 F 就活塾みたい // な？

476 S はい、塾ですね。

477 F は、いはい。

478 S 就活塾みたいのがあってー、

479 S 結構、なんか 90% // の人たちが、1 カ月ぐらいとか、い、1 カ月経ったら、

480 F うんうん。

481 — {アラーム}

482 S 短いんですけど、

483 F はい、はい。

484 S 行きますね。

485 F は // い、はい。

486 S で、日本でもあるかなー。

487 F 日本でありますけど、

488 F そんなに // メジャーじゃないし、

以上のように、相談者は、様々な「前置き＋質問」を用いて談話を展開している。表 5 に、資料別の 6 種の「前置き＋質問」の出現数を示す。

表 5 「前置き＋質問」における種類別合計

前置き 資料番号	①活動 状況	②見解	③伝聞	④先行 発話	⑤話題の 予告	⑥韓国の 事例	合計
【資料 1】	5	2	2	1			10
【資料 2】	1	5	1				7
【資料 3】	6	2					8
【資料 4】		2	2				4
【資料 5】	4						4
【資料 6】					2		2
【資料 7】		3					3
【資料 8】	2	3		1	2		8
NS 合計	18	17	5	2	4	0	46
【資料 9】	2	1		1			4
【資料 10】			1				1
【資料 11】		3	1				4
【資料 12】	3	1	1			1	6
【資料 13】		1			1		2
【資料 14】	3				1		4
【資料 15】							0
【資料 16】		1		1			2
NNS 合計	8	7	3	2	2	1	23
全 16 資料	26	24	8	4	6	1	69

表 5 によると、「前置き＋質問」は全 16 資料のうちの 15 資料にあり、ほぼ全員の相談者が使用している。また、「①自分の活動状況＋質問」は 8 資料に 26 例、「②自分の見解＋質問」は 9 資料に 24 例、「③伝聞＋質問」は 6 資料に 8 例、「④回答者の先行発話＋質問」は 4 資料に 4 例、「⑤話題の予告＋質問」は 4 資料に 6 例用いられていた。

以上のように、「前置き＋質問」は、母語話者と学習者の相談者がともに用いる典型的な質問表現といえる。フォローアップインタビューによると、回答者は、この「前置き＋質問」が、「応答の助けになる」ということであった。例えば、「活動状況を言ってもらえると、その活動について具体的に答えられる」とし、「②自分の見解」、「③伝聞」の提示により、相談者が「どういふことに興味を持っているかが分かるので、その話題に触れながら答えられる」と述べている。そこで、会話の授業では、回答者に対する配慮として、「前置き＋質問」の種類、「～ですけど、」や「～ですが、」等の〈事実説明〉や「～と思うんですけど、」等の〈見解表明〉の「前置き＋質問」の表現形式を学習項目として取り扱うよう提案したい。

5. 考察と今後の課題

本稿では、母語場面と接触場面における大学生と留学生による就職活動の相談の談話を分析対象に、参加者の発話機能に基づき、表現形式を分析した。その結果、発話機能の用いられ方は、学習者の相談者は、主に発話機能の〈Ⅲ. 要求〉の発話を用いて談話展開するのに対し、母語話者は、〈Ⅲ. 要求〉以外に〈Ⅳ. 提供〉を用いた発話で自分の情報や共通話題を提供したり、〈Ⅴ. 受容〉の〈興味〉、〈共感〉で反応しながら、相互作用の顕著な談話展開をしている。一方、学習者は、主に〈Ⅲ. 要求〉の表現を用いて談話展開をしており、応答への反応や〈Ⅳ. 提供〉が少なく、相互作用が希薄な傾向がある。

相談者が用いる表現形式については、母語話者は、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」を用いて、積極的に話に参加していることが明らかになった。学習者も「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「e. 応答に対する反応」の発話は共通して見られたものの、出現数は少なく、「d. 応答のまとめ」、「f. 共通の話題」の発話は見られなかった。母語場面と接触場面ともに見られた共通の特徴である「b. 前置き」については、「～ですけど、」等を用いる「①自分の活動の状況」、「～と思うんですけど、」等を用いる「②自分の見解」、「～と聞いたんですけど、」等を用いる「③伝聞」、「先ほど～とおっしゃってたんですけど、」等で回答者の発話を反復する「④回答者の先行発話」、「～について聞きたいんですけども、」等のメタ言語表現を用いる「⑤話題の予告」、母国の状況を説明する「⑥韓国の事例」が観察された。「b. 前置き＋質問」はほぼ全員の相談者が使用しているため、母語話者と学習者の相談者がともに用いる典型的な質問といえる。

日本語の会話教育では、回答者との相互作用を意識した談話展開のための表現形式を指導する必要がある。具体的には、「a. 応答確認」、「b. 前置き＋質問」、「c. 話題転換」、「d. 応答のまとめ」、「e. 応答に対する反応」、「f. 共通の話題」を例とする発話や、〈Ⅲ. 要求〉、〈Ⅳ. 提供〉、〈Ⅴ. 受容〉を用いた発話で、回答者の発話に積極的に関わり合う談話の展開方法を指導する。また、学習者の発話には、〈Ⅱ. 談話表示〉も少なかったため、話題の進行や話題転換の仕方も学習項目に取り入れたほうがよいと考える。さらに、〈事実説明〉や〈見解表明〉の「b. 前置き＋質問」の種類や表現形式も授業の学習項目として取り扱うことを提案したい。

今後は、談話資料を充実させ、相談者のみならず、回答者の表現形式も分析し、相談者と回答者の相互作用による談話展開を精密に解明したい。また、その分析結果を日本語の会話教育に応用し、より具体的な提案をしたいと考えている。

注

- 1) 以下、母語話者とする。
- 2) 以下、学習者とする。

- 3) 「話段」とは、音声言語最大の単位である「談話」の直接的成分として、また、「談話」と「発話」の中間的単位として、佐久間（1987）により提唱された言語単位である。
 - 4) 調査を実施した大学では、実際に就職活動について先輩に相談をするキャリアサポートが行われている。
 - 5) 回答者 2 名の内、回答者 F は食品メーカーに内定しており、回答者 N は総合商社に内定をしている大学 4 年生である。
 - 6) 調査を実施するにあたり、2012 年 11 月 3 日に早稲田大学大学院日本語教育研究科に研究調査倫理審査申請書を提出し、同年 11 月 29 日に承認された。
 - 7) チェックリストの項目は、「質問」、「聞き手」、「進行」の 3 構成になっており、全 11 項目が設けられている。
 - 8) 談話は調査協力者の許可を得て、録音、録画をした。収集した談話は、ザトラウスキー（1993）と鈴木（2007）の文字化の規則を参考に文字化した。
- * 本稿は、早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法——韓国語学習者の会話教育の提案——』の一部を加筆、修正したものです。

【参考文献】

- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 小林友美（2015）「韓国の大学におけるビジターセッションと会話分析を取り入れた授業-実践報告と学習者の意識変化」『日語日文学』67、99-114.
- 小林友美（2017）『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法——韓国語学習者の会話教育の提案——』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 佐久間まゆみ（1987）「文段認定の一基準（Ⅰ）——提題表現の統括——」『文藝・言語研究言語篇』11、89-135.
- 佐久間まゆみ（2002）「3. 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則共著『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店 pp.119-189
- 佐久間まゆみ（2003）「第5章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店 pp.91-119
- 鈴木香子（2003）『発話機能に基づく日本語の相談の談話の構造分析』早稲田大学大学院日本語教育修士論文（未公開）
- 鈴木香子（2009）『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学モノグラフ 11a 早稲田大学出版部
- 田中弥生（2011）「『質問——回答』における待遇表現の特徴——書籍 QA、WebQA、Yahoo！知恵袋の比較から」『待遇コミュニケーション研究』8、65-80.
- 田中弥生（2017）「相談における談話構造：修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』1、69-78.
- ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 村上恵（1995）「相談談話における説得行動」『広島大学教育学部紀要 第二部』44、219-229.
- 湯浅千映子（2004）「子ども向けラジオ電話相談の談話における行為を示す発話機能」『表現研究』80 表現学会、56-65.

